

【論文】

土佐光成筆「十二月源氏物語図屏風」(ミネアポリス美術館蔵)  
—徳川綱吉に贈られた源氏絵、その伝統と革新—

知念理

はじめに

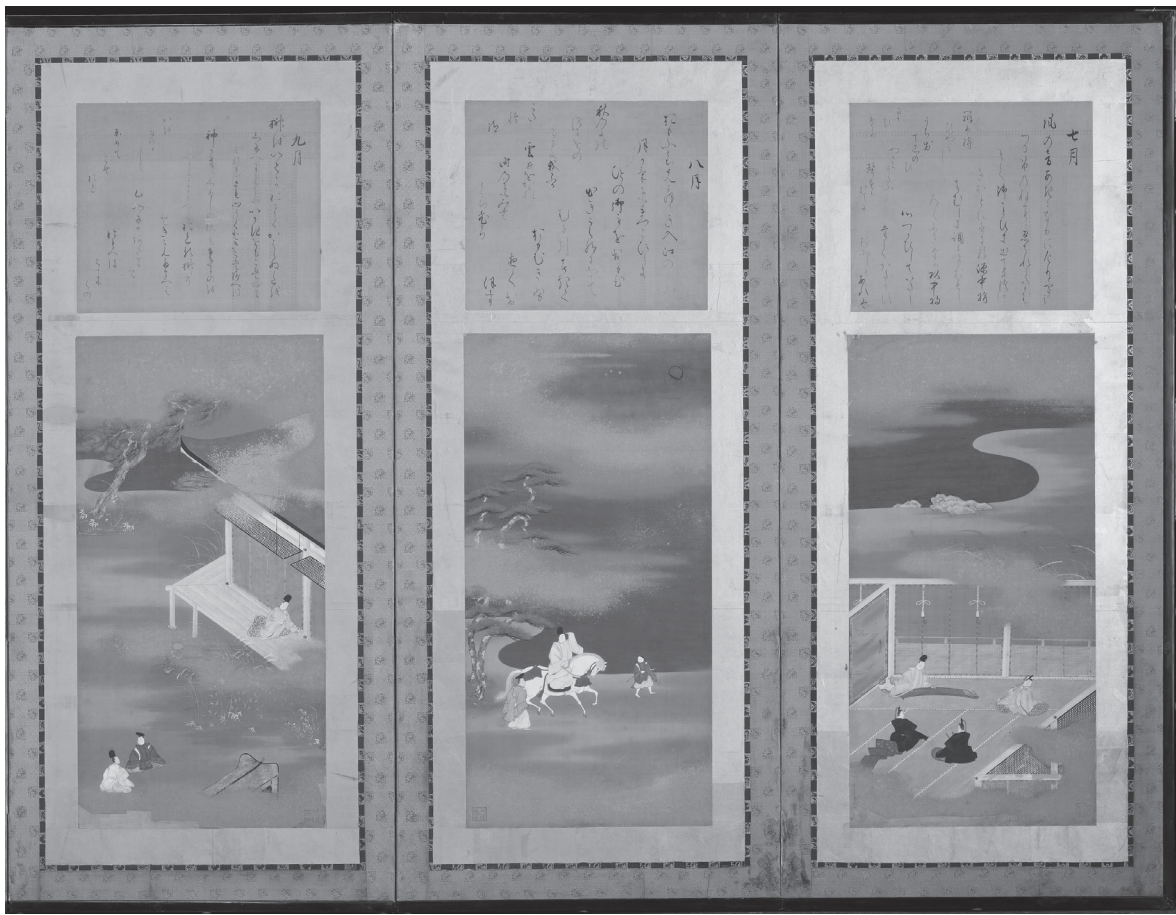
米国のミネアポリス美術館 (Minneapolis Institute of Art、以下MIAと呼ぶ) に、*Scenes from The Tale of Genji representing months of the year* の作品名称で登録される、土佐光成による六曲一隻の押絵貼屏風がある〔図1〕、以下MIA本という<sup>(1)</sup>。現在まで、MIA本を掲載した日本語による図録などの印刷媒体は確認できないが、小考での考察をふまえれば、「十二月源氏物語図屏風」という日本語名称を与えるのがふさわしいと考える作品である。

本作品の初見は、MIAで開催された「Love Affairs: The Tale of Genji in Japanese Art」展(二〇一八年八月一八日〜二〇一九年三月十日)においてであった。展示室のキャプション解説(MIAのウェブサイトのコレクション検索で見られる解説と同文)では、もと一対の左隻にあたる屏風で、『源氏物語』の夏と秋の六ヶ月 (the six months of summer and autumn) にわたる場面が、右から左へと月の順に並べられている、例えば「十月」と題される第四扇目には、紅葉が散りかう宮中で、十九歳の源氏と友人の頭中将が『青

海波』の舞を披露する秋らしい情景が描かれる (shows an appropriately autumnal scene)、といった説明であった<sup>(2)</sup>。

類例らしきものが見いだせない不思議な源氏物語図屏風であったが、齋麻子氏の「靈元院御撰「源氏十二月詞書」考」という論考にふれ、一気に視界が開けた<sup>(3)</sup>。『源氏十二月詞書』の書誌名をもつ写本類の翻刻が示され、MIA本各扇(各月)の色紙に抜書きされた詞書とそれぞれ一致するのであった。つまり、MIA本は『源氏十二月詞書』と称される特別な詞書(場面化)により、月次に配列構成される極めて珍しい源氏物語図であるということがわかった。さらに齋氏は『源氏十二月詞書』の原本成立について検討し、絵の筆者を土佐光成と伝える『源氏十二月詞書』写本の奥書、並びに『徳川実紀』の記事に着目し、宝永二年(一七〇五)に靈元院が徳川綱吉に下賜した「十二月書讀屏風」の存在を浮上させた。すでにMIA本の存在を確認していた稿者は、月名を見出しとする詞書をもつ光成の源氏絵屏風であって、しかも院から將軍へ下賜されたというような特注品となれば、それはMIA本の他に求めないことをまず直感した。

本稿は、従来ほとんど知られていない在米の源氏物語図屏風であるMIA本について詳しい紹介を行う。本作の詞書といわゆる『源氏十二月詞書』と



【図1】 土佐光成筆「十二ヶ月源氏物語図屏風」(ミネアポリス美術館蔵)

の関係を明らかにし、これが『徳川実紀』記載の「十二月畫讀屏風」に該当するものであることを検証する。現存する光成の源氏物語図、および関係資料の検討を交えながら、詞書色紙の染筆者についても比定を試み、近世土佐派による源氏物語図としてのMIA本の位置づけを考察するものである。

## 一 『源氏十二月詞書』と 『徳川実紀』の「十二月畫讀屏風」

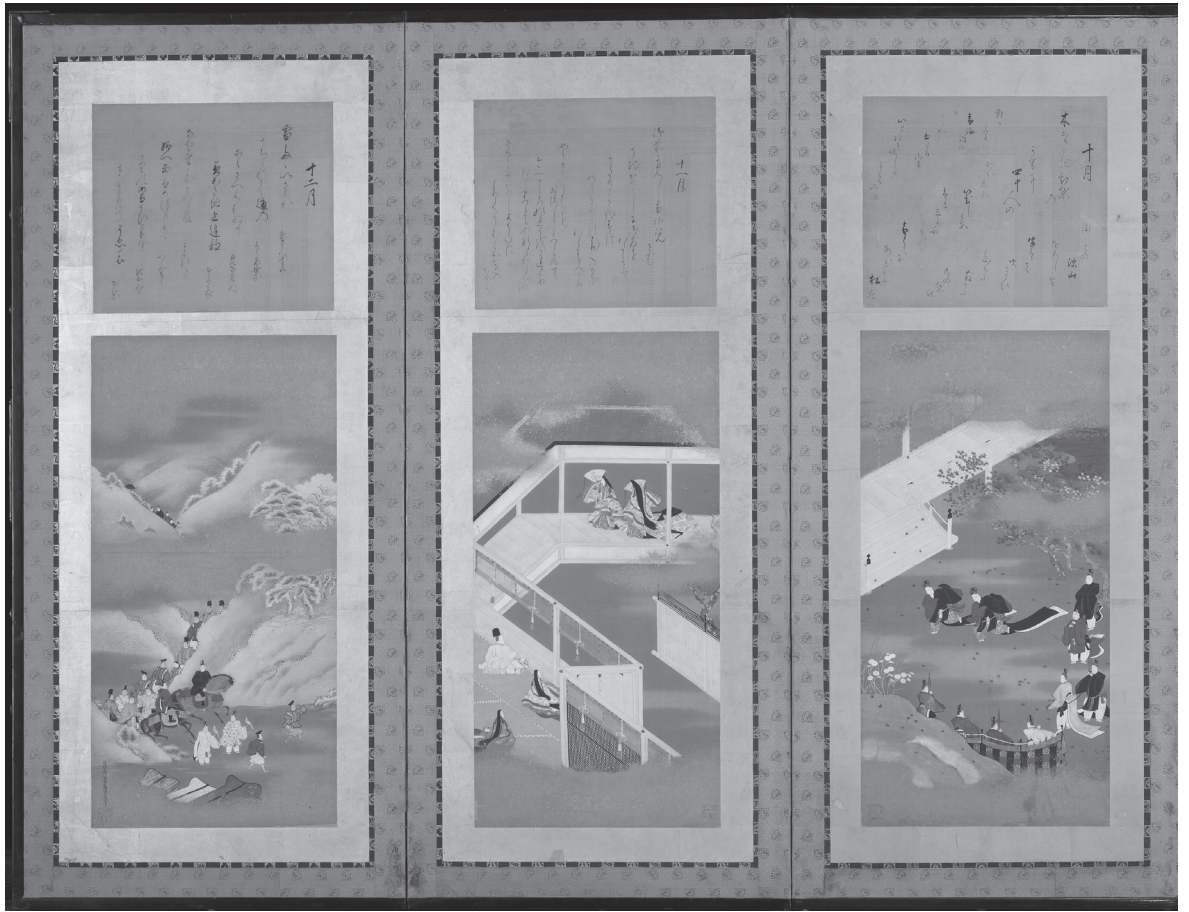
『源氏十二月詞書』との直接的な関係を確認するため、まずMIA本の詞書を見ておきたい。

金地の貼台に絹本着色の本紙画面を各扇に一図(一場面)ずつ貼り、各図の上段には、様々な調子の散らし書きによる詞書色紙が貼り込まれている。その料紙も絹本であり、龍を連珠ではさんだ帯状の文様を縦、横に金泥で摺りだす<sup>4)</sup>。詞書の見出しに帖名はなく月名が記される。各扇に配される帖はそれぞれ、第一扇「七月」(篝火)、第二扇「八月」(明石)、第三扇「九月」(賢木)、第四扇「十月」(紅葉賀)、第五扇「十一月」(少女)、第六扇「十二月」(行幸)で、各場面の概要と翻刻は以下の通りである。

### 「七月」(篝火)【図16】

—源氏、西の対に夕霧、柏木らを招き合奏、御簾奥の玉鬘に聞かせる風の音あきになりけりと聞えつる笛のねに、忍はれてなんとて、御ことひき出で、なつかしきほどにひき給。源中将、はんしき調にいとおもしろくふきたり。頭中将、心つかひして、いたしたてかたうす。おそしとあれば、弁少将ひやうしうち出で、しのひやかにうたふ聲すゝむしにまかひたり。

### 「八月」(明石)【図17】



【図1】 土佐光成筆「十二月月源氏物語図屏風」(ミネアポリス美術館蔵)

―八月十三夜、源氏、馬に乗り、入江沿いに明石の君のもとへ向かう  
おもふとち見まほしき入江の月かけにも、まつこひしきひとの御ことを  
おもひ出きこえ給に、やかてむま引すきて、おもむきぬへくおほす。

秋のよのつきけのこまよ我こふる雲井をかけれ時のまもみん  
と、うちひとりこたれ給。

【九月】(賢木) 【図18】

―六条御息所を訪れた源氏、榊の枝を御簾から差し入れ、歌を交わす  
榊をいささかおりて、かはらぬ色をしるへにてこそ、いかきをもこえ侍  
りにけれ。さも心うく、ときこえ給へは、

神かきはしるしの杉もなきものをいかにまかへておれる榊ぞ

ときこえたまへは、

乙女子かあたりとおもへはさか木はのかをなつかしみとめてこそおれ

【十月】(紅葉賀) 【図19】

―朱雀院行幸の日、源氏、紅葉が散りかう中、頭中将と青海波を舞う  
こたかき紅葉のかけに、四十人のかいしろ、いひしらすふき立たるものゝ  
音ともにあひたる松かせ、まことの深山をろしと聞えて吹まよひ、色  
くくに散かふこの葉のなかより、青海波のかゝやき出たるさま、いとお  
そろしきまてみゆ。

【十一月】(少女) 【図20】

―五節の舞姫の付添い役を選ぶため、源氏、童女らを渡らせ見分する  
御前にめして御覧せんうちならしに、御前をわたらせてときためさせ給  
すつへうもあらず、とりくなるわらはへのやうたいかたちをおほしわ  
つらひて、「今一ところのれうをこれよりたてまつらはや」などわらひ給  
たゝもてなしよういによりてそえらひに入ける。

【十二月】(行幸) 【図21】

―冬の大原野へ冷泉帝が行幸し、多数の臣下、鷹匠らが供奉する

雲たゞいささかうちゝりて、道のそらさへえんなり。みこたち上達部なと、たかにかゝつらひ給へるは、めつらしきかりの御よそひともをまうけたまふ。そゑのたかゝひともは、まして世にめなれぬすり衣みたれきつゝ、けしきことなり。

※改行は解消(和歌を除く)し、句読点を付した

ここで注目されるのが『源氏十二月詞書』と称される一連の写本類である。『源氏十二月絵詞』、『源氏物語月次詞書』など書誌名はさまざまだが、宮内庁書陵部ほかに十以上の伝本が確認されており、靈元院撰とも伝える。内容は『源氏物語』の十二帖から各一場面ずつ選んでその本文を抜き書きしたものであるが、物語中の出来事や行事の時節に従い、正月から十二月へと月次の視点で各帖を配列する点に特徴がある。齋氏が翻刻した有栖川宮A本『源氏十二月詞書』は、見出しには月名に加えて帖名も記す。まずはその後半である七月から十二月に注目すると、「七月 かゝり火」、「八月 あかし」、「九月 さか木」、「十月 もみち賀」、「十一月 をとめ」、「十二月 みゆき」という帖の並び、および各月(帖)の抜き書き本文が、M I A本に貼り込まれた色紙の詞書に一致する<sup>⑤</sup>。

要するに物語の展開(筋)とは無関係に、『源氏十二月詞書』と称される詞書により場面化された十二図からなる源氏物語図屏風、それがM I A本である<sup>⑥</sup>。残念ながらその右隻の所在を未だ見出しえないが、有栖川宮A本にみる正月から六月の帖の並び、すなわち「正月 はつね」、「二月 花宴」、「三月 まきはしら」、「四月 あぶひ」、「五月 ほたる」、「六月 夕かほ」に従うものであったに違いない。各月の詞書本文は前掲註3齋氏論考を参照されたく、ひとまず場面の概要を記す。

正月(初音)

―正月子の日、源氏、明石の姫君を訪ね、庭で童女らが小松を引く  
二月(花宴)

―二月二十日過ぎ、南殿・桜の宴の探韻で、源氏、「春」の字を賜る  
三月(真木柱)

―源氏、玉鬘が去った西の対に渡り、庭の山吹を見て想いを歌に詠む  
四月(葵)

―新齋院の御禊の日、特別の宣旨で源氏も上達部らと供奉に加わる  
五月(螢)

―五月五日、六条院馬場殿で競射があり、着飾った女房らが見物する  
六月(夕顔)

―源氏が夕顔を手折らせた家の童女が出てきて、花を載せる扇を差出すこのうち、とくに二月(花宴)と四月(葵)では、室町時代から江戸時代にかけての画帖・絵巻・屏風・版本など多数の源氏絵に照らしても類例がない場面と認められ注目されるが、この問題については後述する。

先の翻刻に続いて齋氏は、有栖川宮A本、および福井松平本の奥書から『源氏十二月詞書』の原本について検討を加え、以下のような見解を示した。

すなわち、『源氏十二月詞書』の原本は土佐光成が描く屏風の詞書として、宝永二年(一七〇五)の二月頃に靈元院から江戸の將軍家に贈られたものであった、またそれは『徳川実紀』の宝永二年三月五日条に記される、徳川綱吉の右大臣転任に際して、靈元院から祝儀として下賜された「十二月畫讚屏風」にあたるものである。有栖川宮A本、福井松平本の奥書(前掲註3の齋氏論考の翻刻による)、『徳川実紀』の当該記事(但し抜粋)を示すと以下の通りである<sup>⑦</sup>。

〈有栖川宮A本・奥書〉

右源氏物語月次詞書者宝永二年春

賜將軍家為御屏風繪之替

上皇始令撰出給押色紙形於繪上被書之

諸家寄合書但書月不書卷名

以 右衛門督為村卿所持本書寫之

寛延二年七月十八日一品中務卿職仁親王

〈福井松平本・奥書〉

右寶永二年二月ノ月 仙院

被遣于關東御屏風御色紙

源氏詞十二月□卷之詞

勅撰也筆者関白三大臣法

親王大中納言參議已下也

繪土佐刑部畫之

『徳川実紀』・宝永二年三月五日条

兩御所御轉任御昇進あるをもて、(中略)この日儀物は、(中略)右府御轉任を賀せられ、(中略)外に御所へ、内より三十六人家集、院より

十二月畫贊屏風、女院より三十六歌仙手鑑、(後略)

宝永二年春の時点における「土佐刑部」が、元禄九年(一六九六)五月に「従五位下」、六月に「刑部権大輔」に叙位、任官されている土佐光成(一六四六〜一七一〇)を指すことも含めて、『源氏十二月詞書』と『徳川実紀』の「十二月畫讚屏風」を結びつけた齋氏の着眼は十分に首肯されるものである。福井松平本奥書の宝永二年二月という時にはまた、綱吉の六十歳を賀すため、東

山天皇から光成と光高(光成の子)の合作による「大樹六十賀御屏風」(寄合詞書による十二月歌意図)が江戸へ送られている。<sup>(8)</sup> これもいわゆる月次屏風で紛らわしいが、それゆえ靈元院から綱吉の右大臣転任の祝儀として下賜されたと『徳川実紀』に記された「十二月畫贊屏風」は、「源氏」の語こそ付されないものの、『源氏十二月詞書』の色紙を備えた土佐光成筆の屏風絵を指す蓋然性が極めて高いと判断されるのである。MIA本こそがその左隻にほかならないものと稿者は想定する。

上掲の有栖川宮A本奥書には、「押色紙形於繪上被書之／諸家寄合書但書月不書卷名」とある。月名のみで巻名を記さない寄合書きの詞書色紙が絵の上に貼り込まれている、という奥書筆録者の留意点であるが、MIA本の仕立てはその文言通りの状態を示していることから、「十二月畫讚屏風」とMIA本の同一性を疑う余地はまずない。

## 二 MIA本と土佐光成の源氏絵

近年、『源氏十二月詞書』の新たな伝本(一巻、同志社大学文化情報学部蔵)を紹介した福田智子氏は、「物語の時の流れを超えて、月次という別次元の枠に物語を落とし込むという行為」により、「公家・武家を問わず教養として重視されていた『源氏物語』のより斬新な享受のあり方」として発想されたのが『源氏十二月詞書』であるとした。藤原定家の「詠花鳥和歌各十二首」とともに、「江戸中期において、『源氏十二月』は、公卿を中心として繰り返し筆写され続けていたことが推察される」、そしてその「要因を、平安朝以来の月次屏風絵・月次屏風歌の伝統を基底とした、物語世界の再構成による季節の移ろいの現出とともに、宮廷における年中行事の伝承が、(靈元院の、※稿者註)勅撰という権威付けにより促進されたという点に求めてみたい」

と述べている。<sup>⑨</sup>

『源氏十二月詞書』の最古の書写本は、天正十六年（一五八八）の大友吉統筆「十二月言葉手鑑」（大分市歴史資料館蔵）までさかのぼるようである<sup>⑩</sup>が、江戸時代に下る『源氏十二月詞書』写本が霊元院撰を伝える理由は、王朝古典に根ざす芸文復興の近世的プロデューサーとして、霊元院が『源氏十二月詞書』をめぐる画期的な創造の中心であったことの謂いとしてではないだろうか。宮内庁図書寮文庫所蔵の『源氏物語』関係の書写史料を見渡しても霊元院の存在感は極めて大きく、その享受に関する並々ならぬ好尚をうかがわせる。霊元院が宮廷絵所預の土佐光成を起用して制作させたと思われる「十二月畫讀屏風」（＝MIA本）は、『源氏十二月詞書』を初めて絵画化した、やまと絵史上のメモリアルな作品であった可能性もあり、一雙で現存すれば間違いなく、光成の画業を代表する作品の筆頭に位置づけられるべき作品とみなされる。

では、MIA本の各月（帖）の絵画化場面について概観しておこう。同一場面が選択されるやまと絵系の主要な画帖・色紙作例の図様を一覧にしたのが次ページの【表1】であるが、MIA本について若干のメモを補足しておく。

#### 「七月」（篝火）【口絵8】

当該場面は類例が少ないなか、源氏が夕霧、柏木兄弟と合奏にいたるまでの間で作例毎に時間差があり、MIA本が最も後の時間帯にあたる。

#### 「八月」（明石）【口絵9】

当該場面は源氏一行の進行方向が左向きか、右向きかに分かれる。MIA本のみ、入江を隔てた三昧堂、もしくは明石の君の邸を描かない。

#### 「九月」（賢木）【口絵10】

当該場面はかなり高確率で選択される。ハーバード大本のみ源氏を室内に、他は邸の濡縁に立つか座すか、御簾前か御簾越しかで図様が変化する。

#### 「十月」（紅葉賀）【口絵11】

当該場面は試楽と行幸当日（左大将や源氏の挿頭に菊）双方の図様があるが、MIA本も庭前には菊が咲き乱れ、行幸当日の時間差場面といえるか。

#### 「十一月」（少女）【口絵12】

当該場面は少数で、久保惣「光起絵巻」は大坂青山歴史博物館旧蔵。【表1】以外だが、京博「伝光元画帖」では夕霧が五節舞姫を覗き見る。

#### 「十二月」（行幸）【口絵13】

当該場面は大原野到着前後で鳳輦を大きく扱う作例が主だが、ハーバード大本は見物の牛車、MIA本は先駆けの供人らで独自性がある。

以上、本来一雙であったMIA本の左隻に貼られた「七月」から「十二月」の各帖の絵画化場面を概観した。室町時代から江戸時代にかけてのやまと絵系諸作例の系譜を整理、継承、発展させたというべき、当代の絵所預にふさわしい画作を認めることができる。とくに新図様とみられる「七月」（篝火）、「十二月」（行幸）のほか、縦長画面を意識した構図に工夫、新味をみせる「十一月」（紅葉賀）、「十一月」（少女）など、光成の源氏絵制作の精華が披露されている。

ところで、光成の父である光起以降、土佐派は工房単位での組織だった源氏絵制作を規模縮小し、特注品的な上製本に限定していった状況がうかがわれるが、「源氏物語朝顔図」（根津美術館蔵<sup>⑪</sup>）をはじめとする、画面余白への金雲や箔による加飾を抑え、比較的軽淡なトーンの彩色を特徴とする掛幅作品が源氏絵のレパートリーとして加わるようになった。光成もそうした路線を継承したと考えられ、中幅を紫式部とした「紫式部・須磨・明石図」（滋賀・石山寺蔵<sup>⑫</sup>）や、左右に花鳥図を合わせた「源氏浮舟・春秋花鳥図」（皇居三の丸尚蔵館収蔵）のような縦三幅対形式への形式的拡張を試みている。対するにMIA本では、金泥引きの地に切箔・砂子・微塵箔を密に蒔いた

「十二月」 行幸	「十一月」 少女	「十月」 紅葉賀	「九月」 賢木	「八月」 明石	「七月」 篝火	MIA本 詞書 比較作例
三・68	二・307～308	一・274	一・370	二・82	三・41～42	岩波日本古典文学大系 『源氏物語』巻・ページ
鳳輦に先駆ける 供人や鷹飼たち	← 女童	庭前に紅葉、菊	御簾前・座	源氏一行 →	西の対で合奏	MIA本
びっしり並んだ 物見の牛車		紅葉のみ	室内	源氏一行 →		ハーバード大 「光信画帖」
			御簾越・座	← 源氏一行	源氏が和琴を 弾き始める	浄土寺 「扇面貼交屏風」
大原野の山路を 進む鳳輦、鷹狩			御簾前・立			久保惣 「光吉画帖」
			光吉:御簾前・立 長次郎:御簾前・座			京博 「光吉画帖」
			御簾越・立	源氏一行 →		任天堂 「光則画帖」
			御簾前・立		夕霧らが西の対 へ渡ってくる	徳川 「光則画帖」
	女童 →					久保惣 「光起絵巻」
		庭前に紅葉、菊 源氏の挿頭に菊	御簾前・座	← 源氏一行		堺市博 「光吉周辺色紙」
大原野の山路を 進む鳳輦、鷹狩		紅葉のみ	御簾前・座			サントリー 「如慶画帖」
大原野に鳳輦を 止める行幸一行	女童 →				源氏、東の対の 音色に耳をとめる	MIHO 「具慶絵巻」

【表1】

凡例：

ハーバード大「光信画帖」／土佐光信筆「源氏物語画帖」 ハーバード大学美術館蔵  
久保惣「光吉画帖」／土佐光吉筆「源氏物語手鑑」 和泉市久保惣記念美術館蔵  
任天堂「光則画帖」／土佐光則筆「源氏物語画帖」 任天堂株式会社蔵  
久保惣「光起絵巻」／土佐光起筆「源氏物語絵巻」 和泉市久保惣記念美術館蔵  
サントリー「如慶画帖」／住吉如慶筆「源氏物語画帖」 サントリー美術館蔵

浄土寺「扇面貼交屏風」／「源氏物語図扇面貼交屏風」 広島・浄土寺蔵  
京博「光吉画帖」／土佐光吉筆「源氏物語絵色紙帖」 京都国立博物館蔵  
徳川「光則画帖」／土佐光則筆「源氏物語画帖」 徳川美術館蔵  
堺市博「光吉周辺色紙」／土佐派「源氏物語図色紙」 堺市博物館蔵  
MIHO「具慶絵巻」／住吉具慶筆「源氏物語絵巻」 MIHO MUSEUM 蔵

不定形な雲霞を重ねて画面を柔らかく分節する。地面も陰影変化を与える霞のような金泥引きを施した濃密な画面空間が作り込まれる。源氏をはじめとする貴族の面貌は引目鉤鼻で表され【図3】、臣下、供人らの実人的な表情と明確に描き分ける【図4】。貴族の引目については、その中央部分だけ墨をやや濃くして瞳のような印象を与え、直衣は限を入れるように赤い内衣をばかして透かすほか、典型的な姿態の馬【図5】や松樹の葉叢のバランスなど【図2】左幅参照）、モチーフ毎に光成独自の特徴的な描法が看取される。光成が父光起から継承した明澄な色彩感覚と小画面源氏絵のフォーマットを縦長の画面空間へ応用しようとする試み、それがMIA本の各画面であろう。石山寺の三幅対【図2】のように、金気を控えた軽淡な表現、遠後景を抱き合わせた縦幅構図とは構想を異にする。そこに、新しい源氏絵（やまと絵様式）の掌握者である徳川將軍家と江戸狩野<sup>13</sup>に向けた、伝統的権威の長たる靈元院、宮廷絵師の棟梁・土佐光成の矜持を見る。鷹狩りが始まろうとする「十二月」（行幸）を綱吉に見せる意味も小さくはないのだろう。いずれにせよ、縦寸法がはるかに伸び、俯瞰視点も高くとられたMIA本では、大きな余白をいかに扱うかに絵師の力量が求められる。「十月」（紅葉賀）、「十一月」（少女）、「十二月」（行幸）の各図では、モチーフの種類、数、構成・配置を練って縦長画面にフィットする構図の創案に成功している。また「九月」（賢木）も、邸と庭前に控える従者との中間に、藤袴、薄、桔梗など秋草の風情を繊細な筆致で描き【図6】、画面空間を巧みに結節した。他方、「七月」（篝火）と「八月」（明石）では、小画面源氏絵では画面周縁にタイトに埋め込まれていた遣水、松樹、月空といった諸モチーフを大幅に膨らませながら構図の保持を図るが、苦慮もにじませる。MIA本の落款は、第六扇目（十二月・行幸）の絵の左下に「従五位下土佐刑部権大輔藤原光成筆」の款記と朱文方印「光成印章」を認める【図7】。



【图2】 土佐光成筆「紫式部・須磨・明石図」(石山寺蔵)



【图5】 MIA本「八月」(明石)・部分



【图3】 MIA本「九月」(賢木)・部分



【图6】 MIA本「九月」(賢木)・部分

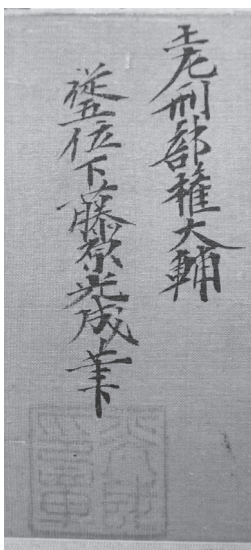


【图4】 MIA本「十二月」(行幸)・部分

第一扇〜第五扇目の絵の下方にも同印を捺す。第五扇目の同印は比較的損耗が軽い【図8】。光成は白文方印「光成印章」も用いているが、現存作例は両印ともにごくわずかである。朱文方印「光成印章」は、管見では「七夕図」（敦賀市立博物館蔵）<sup>14</sup>、「永井直種像」【図9】（京都・悲田院蔵、直種は高槻藩三代藩主）の二例にとどまる<sup>15</sup>。前者は「土佐／正六位下左近衛将監藤原光成筆」の款記を有し、従五位下への昇進前の使用例である。後者は「土左刑部権大輔／従五位下藤原光成筆」の款記【図10】を有し、従五位昇進後の特徴である。「佐」↓「左」へ用字の変化がみられる。「左」とともに「輔」の車偏を「ヨ」と略す款記もままあるなか、MIA本では「佐」、「輔」とともに正字を使用している。朱文方印「光成印章」の使用と合わせ、將軍家への下賜という特別な制作事情を反映した用例と考えたい。

ここまでMIA本の詞書、絵画化場面、諸表現、落款・印章とみてきた。本来の右隻（正月〜六月）に関する検討が残されたが、本稿執筆の準備を進めるなかで、幸いなことに、一雙を保持するMIA本の稀有の類品を確認するにいったつた。土佐光孚（一七八〇〜一八五二）筆「源氏物語貼込屏風」（徳川美術館蔵）【図11】である。各扇とも本紙画面上方の三分の一程度は金泥の霞引きとし、当初から詞書色紙を伴わない屏風であったとみられる<sup>16</sup>。制作事情、享受の実態は不詳であるが、徳川綱吉に贈られた「十二月畫讀屏風」が有したであろう、十二月月十二帖の景色（図様）をほぼ復元するものと見込まれる。

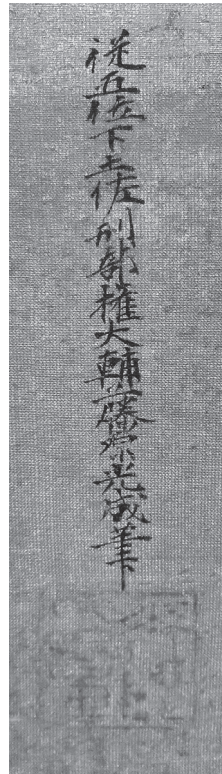
各月（帖）の図様は、十月（紅葉賀）では、菊を手折る左大将や背景などに図様変更が顕著に認められるが、そのほかは概ねMIA本を踏襲する。この主題が土佐派内で粉本として蓄積、継承されてきたことがわかるが、かつての改装の影響か、【表2】に示すように月（帖）の配列が左・右隻をまたいでかなり乱れている。場面化の類例が知られていない二月（花宴）の探韻



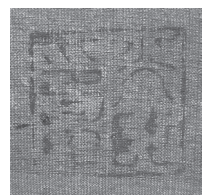
【図10】 土佐光成筆「永井直種像」（悲田院蔵）落款



【図9】 土佐光成筆「永井直種像」（悲田院蔵）



【図7】 MIA本 落款



【図8】 MIA本 印章



【図11】 土佐光孚筆「源氏物語貼込屏風」(徳川美術館蔵)・右隻

徳川美術館所蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

は現状では右隻・第三扇に、四月(葵)の新斎院の御禊供奉は左隻・第三扇にそれぞれ位置する。

なお、先出の有栖川宮A本の三月(真木柱)の抄出本文は、「くれ竹のませにわさとなうさきかゝりたる／におひいとおもしろし／色に衣をなと／の給ひて／おもはずに井手の中道へたつとも／いはてそ恋るやまふきの花かほに見え／つゝなどの給ふもきく人なし」である。<sup>18)</sup> 玉鬘が去った西の対に源氏が渡り、庭に咲く山吹を見て玉鬘への想いを歌に詠む場面で、【表1】の徳川「光則画帖」、M I H O「具慶絵巻」に絵画化される。光孚本では現状で右隻・第一扇の図が三月(真木柱)のはずで、確かに庭の籬に山吹が咲いて当該場面を思わせるが判然としない点がある。この場面は右の「光則画帖」、「具慶絵巻」のように描写人物は源氏一人でなければならぬが、光孚本では源氏の傍らに玉鬘とみられる女性を描いている。その面影を偲んで思いに暮れる源氏の胸中を投影する？構想なのであろうか。M I A本の右隻出現を待ちつつ、この点は後考を期す。

さて、光成による源氏絵は光起以上に遺品が少なく、M I A本に前後する時期の源氏絵制作の動向について把握しづらいのが現状である。そうしたなか、M I A本にごく近い元禄十五年(一七〇二)に、ある源氏物語図屏風の制作に光成が起用されたことを示唆する史料がある。『源氏物語絵詞新作草稿』(陽明文庫蔵)がそれで(但し未見)、巻末には「元禄十五廿六承仰撰出也 廿七八両日ニ撰大概了御屏風十二枚染候詞也云々」と記される。<sup>19)</sup> 付属の極状に、「桐壺」、「はゝき木」、「空蟬」、「紅葉賀」、「花宴」、「濡標」、「合」、「松風」、「乙女」、「はつね」、「胡蝶」、「藤裏葉」の十二場面について詞書染筆者名が記され、絵の筆者については「押絵筆者 土佐従五位下刑部権大納言藤原光成」と記す。抄出される本文は十八帖分あり、極状とは異なる十二帖の組合せも記されるという。



【図11】 土佐光孚筆「源氏物語貼込屏風」(徳川美術館蔵)・左隻

徳川美術館蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

第6扇	第5扇	第4扇	第3扇	第2扇	第1扇	現状	右隻
夕顔	蛭	少女	花宴	初音	真木柱	修正	
夕顔	蛭	葵	真木柱	花宴	初音	現状	左隻
行幸	紅葉賀	篝火	葵	賢木	明石	修正	
行幸	少女	紅葉賀	賢木	明石	篝火	修正	

【表2】

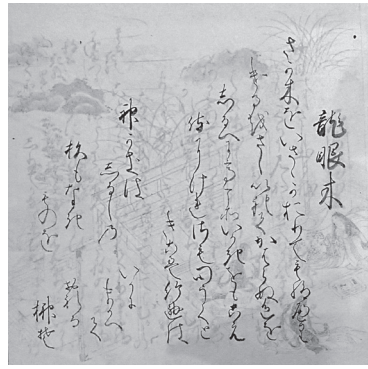
ともかくも右の「御屏風十二枚染候詞」とは、『基熙公記』の同年同月の記事にみえる、近衛基熙が東山天皇から「新撰」するよう下命を受けた源氏絵屏風のための詞書にあたるものとみてよい。<sup>20</sup> 霊元院が『源氏十二月詞書』に基づく絵画化を議論しようとする動きがうかがえることは興味深い。「押絵」という文言から、この屏風は縦長画面の上部に詞書色紙を貼るか、それぞれを上・下に貼り分けたMIA本と同趣の押絵貼仕立てによる六曲一双屏風であったことがわかる。光成はその晩年において、MIA本に比肩すべき上製本とみられる、縦長画面によるまた別の源氏物語図屏風の制作に携わったと考えられるのである。

先に現存する光成の源氏絵作例として、石山寺、皇居三の丸尚蔵館の各三幅対をあげたが、土佐派画人の伝統的な作画領域という意味合いにおいては、色紙形小画面による「源氏物語図色紙貼交屏風」(ミネアポリス美術館蔵、バークコレクション、以下、MIA「光成貼交」という)の存在は見逃ごせない。落款形式、画風からいまだ光成の若描きと考えてよい実に貴重な一作である。<sup>21</sup> MIA「光成貼交」各帖の絵は、私見では「帚木」、「空蟬」、「篝火」の三帖を除く大多数の場面の選択をMIO「具慶絵巻」に一致させることをまずここでは指摘しておきたい(但し、図様は異なる)。MIO「具慶絵巻」は他に類例のない独自場面を数多く含むことで知られるが、土佐派にはそうした源氏絵のセットは知られておらず、光成による住吉派の源氏絵に対する何らかの情報収集にもとづく制作とも考えられ、光成の画歴を構築するうえで欠かすことのできない遺作と認められる。

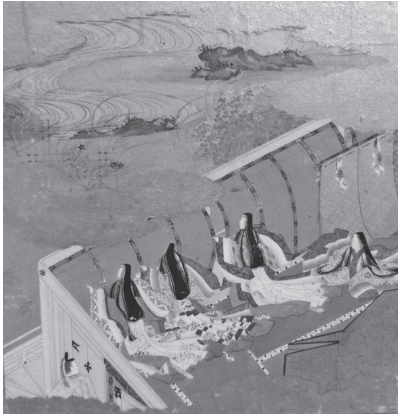
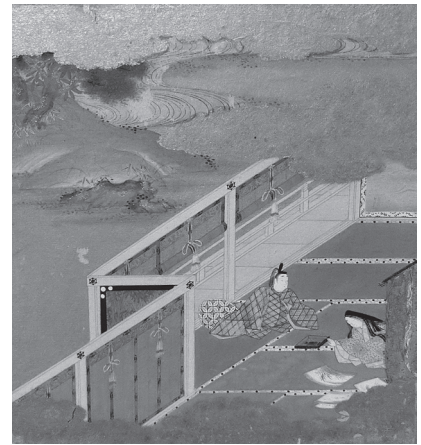
【図12】はMIA「光成貼交」の「蛭」の絵で、長雨の季節、光源氏が玉鬘のもとで物語談義する場面である。MIO「具慶絵巻」以外にも、久保惣「伝光則扇面」中に同場面があることが近年わかった。<sup>22</sup> 光成の作画は、引



【図13】伝土佐光成 「源氏絵詞」（静嘉堂文庫美術館蔵）のうち、「賢木」



【図12】土佐光成筆「源氏物語図色紙貼交屏風」  
（ミネアポリス美術館蔵）・右隻のうち、「蛭」



【図15】土佐光成筆「源氏物語図色紙貼交屏風」  
（ミネアポリス美術館蔵）・左隻のうち、「野分」

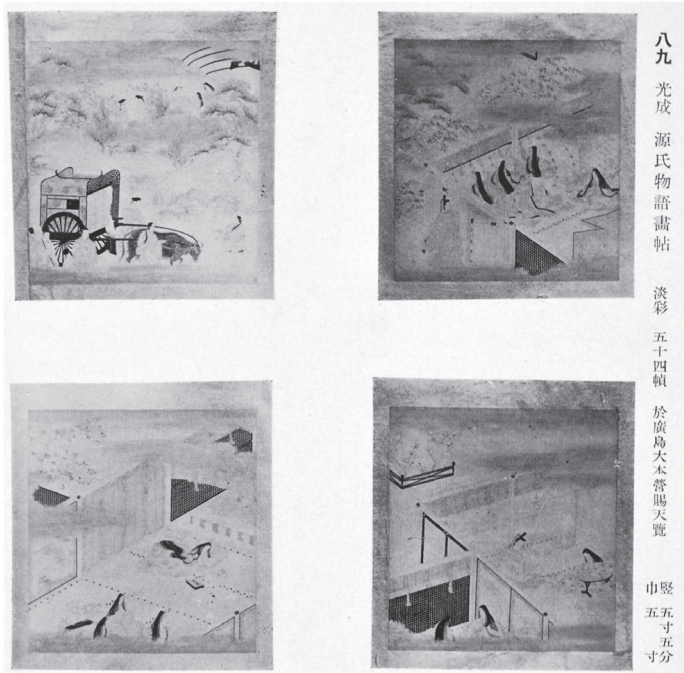
【図12】・【図15】

Tosa Mitsunari, Japanese, 1646-1710  
Scenes from The Tale of Genji,  
late 17th century Six-panel folding screen, a pair;  
ink, color, gold, and silver on paper  
67 1/2×145 5/8×3/4 in. (171.45×369.89×1.91cm)  
67 1/2×139 1/2×3/4 in. (171.45×354.33×1.91cm) (outer frame)  
Minneapolis Institute of Art, Mary Griggs Burke Collection,  
Gift of the Mary and Jackson Burke Foundation (2015.79.40.1-2)

目鉤鼻の素朴な人物と吹抜屋台を基本とする定型的な硬い構図を示し、久保惣「伝光則扇面」、M I H O「具慶絵巻」の洗練された表現とは対照的である。しかしながら物語本文に忠実に、硯を右手で押しやる玉鬘の所作を含んだ独自の図様がみられ、そこに自家の伝統継承と、さらなる発展を目指して研鑽を積む土佐派本流絵師のプライドを感じさせる。光成の数少ない五十四帖源氏絵であるM I A「光成貼交」については、より詳しい検討を踏まえた正確な位置づけが今後なされるべきと考える。

またさらに、光成の源氏絵制作をうかがう史料として、『源氏物語』享受史研究の方面ではよく知られてきた「源氏絵詞」（静嘉堂文庫美術館蔵）がある。<sup>(23)</sup>色紙型源氏絵五十四帖分の絵・詞書を写した袋綴じの冊子で、表紙に「源氏絵詞 土佐光成図」とされる。絵の各所に色や装束、建具に関する注記があり、原本は白描淡彩であったとみられる。【図13】はその「賢木」（袋綴じの表・裏）。原本が光成の真筆であったかどうかは不詳だが、静嘉堂「源氏絵詞」が写す五十四帖は由緒正しい土佐派の源氏絵に依拠するものと推察される。つまり、光起による貴重な五十四帖源氏絵である個人「光起画帖」<sup>(24)</sup>と密接な関連性が認められ、「空蟬」、「若紫」、「紅葉賀」、「手習」、「夢浮橋」を除く四十九帖分の絵が、およその図様として両本で一致をみる点を指摘しておきたい。静嘉堂「源氏絵詞」の原本と個人「光起画帖」の厳密な前後関係も不詳ながら、父光起による五十四帖図様を基本にした独自の画帖作品を光成が手がけていたとしても何ら不自然ではない。

なお、両本の詞書と比較すると、完全に一致する本文箇所を抄出するのは、「桐壺」、「常夏」、「柏木」、「紅梅」の四帖のみである。静嘉堂「源氏絵詞」のほうが圧倒的に長文で、散し書きが多用される。逆に、個人「光起画帖」は総じて短文で、和歌のみを詞書とする帖も目立つ。先掲の「賢木」【図13】は、源氏と朝顔の齋院が櫛に木綿をつけて歌をかわす珍しい場面である



【図14】『松洞庵小津家所蔵品入札目録』（東京文化財研究所蔵）のうち、「八九 光成 源氏物語画帖」

画像提供 東京文化財研究所

が、その詞は個人「光起画帖」とは異なり、源氏が榊の枝を御簾から差入れ、六条御息所と歌を交わす、もつともポピュラーな場面の本文を抄出する。<sup>25)</sup>

静嘉堂「源氏絵詞」に関連して、いわゆる「住吉家鑑定控」（東京藝術大学付属図書館蔵）中の、光成筆と鑑定された源氏絵についても付言しておく。「手鑑 源氏物語絵 五拾四枚」、「墨画 源氏物語 地紙形／小押絵 五拾四枚」、「墨絵 源氏物語色紙 五拾四枚」、「墨絵 源氏小色紙 六拾枚」の四点である。<sup>26)</sup> いずれも画帖とみておきたいが、うち三点は「墨画」、「墨絵」で、これは白描本とみられ、「地紙形」、つまり扇面も一点ある。静嘉堂「源氏絵詞」の原本が墨画淡彩とみられることと合わせ、光成が五十四帖源氏絵のバリエーションとして、光則以来の白描系小画面作例を手掛けていたことが示

唆される。

こうした白描（淡彩）の光成による源氏物語画帖の現存作例はいまだ管見に入っていないが、かろうじて売立目録中に関連資料を見いだすことができる。『松洞庵 小津家所蔵品入札目録』（東京文化財研究所蔵、昭和七年五月・於京都美術倶楽部）の八九番「光成 源氏物語画帖」【図14】である。<sup>27)</sup> 上段右から「野分」、「閑屋」、下段右から「行幸」、「絵合」の四図が掲載される。注目されるのは、「野分」はMIA「光成貼交」【図15】と同図様であり、他の三図が個人「光起画帖」、静嘉堂「源氏絵詞」と同図様を示すことである。光起による五十四帖図様の規範性の高さとともに、光成のレパートリーとして白描系の小画面源氏絵制作の一端を垣間見ることができる。

### 三 詞書染筆者の比定

さいごに、MIA本の詞書筆者の比定を試みて、本稿を締めくくりたい。屏風箱、筆者目録ほかの文書類など、MIA本に関する付属資料の有無については調査が行き届いておらず未詳である。<sup>28)</sup> 筆跡比較の対象としては、MIA本と近い制作時期であって、藤原定家の「詠花鳥和歌各十二首」に関わる以下の三作例に絞り込むことができた。

- ① 近衛家熙筆「十二ヶ月花鳥和歌」（皇居三の丸尚蔵館収蔵）
- ② 「十二ヶ月花鳥図屏風」（サンフランシスコ・アジア美術館蔵、ブランデーコレクション、絵：山本素軒筆）【図28】、元禄十六年（一七〇三）
- ③ 「六義園十二ヶ月花鳥和歌」（公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会蔵、絵：石山基董（師香）筆）、宝永四年（一七〇七）頃。<sup>29)</sup>

先にMIA本各月（帖）の詞書染筆者に比定できると考える公卿らについて列記すれば以下になる。「十二月畫讀屏風」が下賜された宝永二年

三月時点の官位を付す。

「七月」(篝火) 近衛家熙(一六六七〜一七三六) 左大臣

「八月」(明石) 堯延法親王(一六七七〜一七一九) 二品

「九月」(賢木) 今出川伊季(一六六〇〜一七〇九) 権大納言

「十月」(紅葉賀) 九条輔実(一六六九〜一七二九) 右大臣

「十一月」(少女) 裏松意光(一六五二〜一七〇七) 前権中納言

「十二月」(行幸) 武者小路実陰(一六六一〜一七三八) 参議

徳川綱吉の右大臣転任を祝して下賜される屏風詞書の筆者としてふさわしい錚々たる顔ぶれである。このうち武者小路実陰の筆跡は、公卿寄合書による諸作品になかなか見いだせないが、霊元院歌壇の中心として院が厚い信頼を寄せた人物で、巻末にあたる「十二月」(行幸)の染筆者にふさわしい。

まず「七月」(篝火)の詞書【図16】については、上掲①三の丸尚蔵館本の「正月」(近衛家熙)【図22】に、以下のような近似する筆跡(□で囲んだ文字)が確認できる。なお【図16】と【図27】の文字を囲む□は稿者による加工である。

「月」・「風の」・「あ」・「の」(乃)「む」・「ひき」(支)「出」・「そ」(所)・

「は」(盤)「」・「や」・「うち」

続いて「八月」(明石)の詞書【図17】については、上掲②アジア美術館本の「十二月」(堯延法親王)【図23】に、以下のような近似する筆跡(□で囲んだ文字)が確認できる。

「月」・「ほ」(保)「」・「の」・「む」・「の」(乃)「」・「の」(能)「」・「つ」(津)「」・「を」・

「か」・「う」

続いて「九月」(賢木)の詞書【図18】については、上掲③柳沢文庫本「四月」(今出川伊季)【図24】に、以下のような近似する筆跡(□で囲んだ文字)が確認できる。

「月」・「か」・「し」(志)「」・「も」(毛)「」・「な」(奈)「」・「の」・「は」(丹)「」・  
「れ」(連)「」・「た」(多)「」・「つ」(川)「」

続いて「十月」(紅葉賀)の詞書【図19】については、上掲②アジア美術館本「八月」(九条輔実)【図25】に、以下のような近似する筆跡(□で囲んだ文字)が確認できる。

「た」(堂)「」・「き」(起)「」・「か」(可)「」・「に」(耳)「」・「し」(志)「」・「あ」・  
「ろ」(露)「」・「き」

続いて「十一月」(少女)の詞書【図20】については、上掲②アジア美術館本「十月」(裏松意光)【図26】に、以下のような近似する筆跡(□で囲んだ文字)が確認できる。

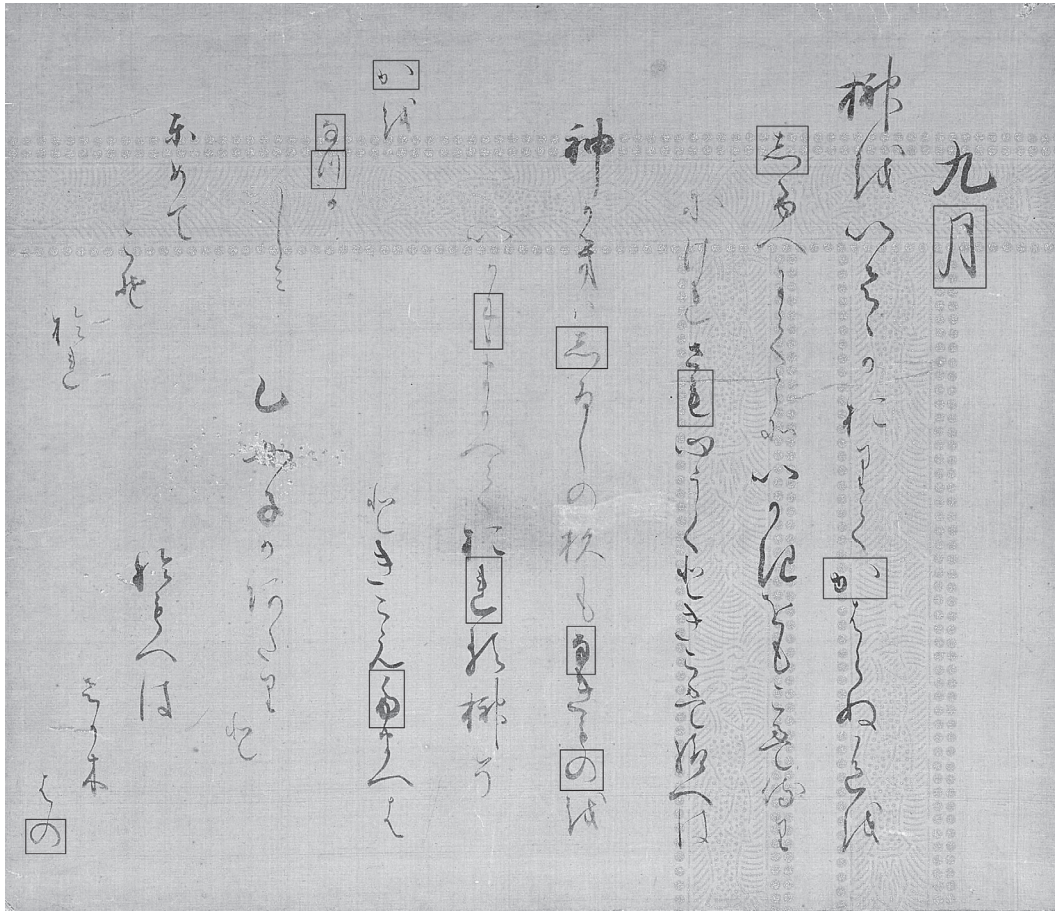
「月」・「め」(免)「」・「む」・「な」・「を」・「す」(須)「」・「る」(累)「」・「の」(農)「」・  
「ま」(末)「」・「た」(堂)「」・「に」

さいごに「十二月」(行幸)の詞書【図21】については、上掲③柳沢文庫本「八月」(武者小路実陰)【図27】に、以下のような近似する筆跡(□で囲んだ文字)が確認できる。

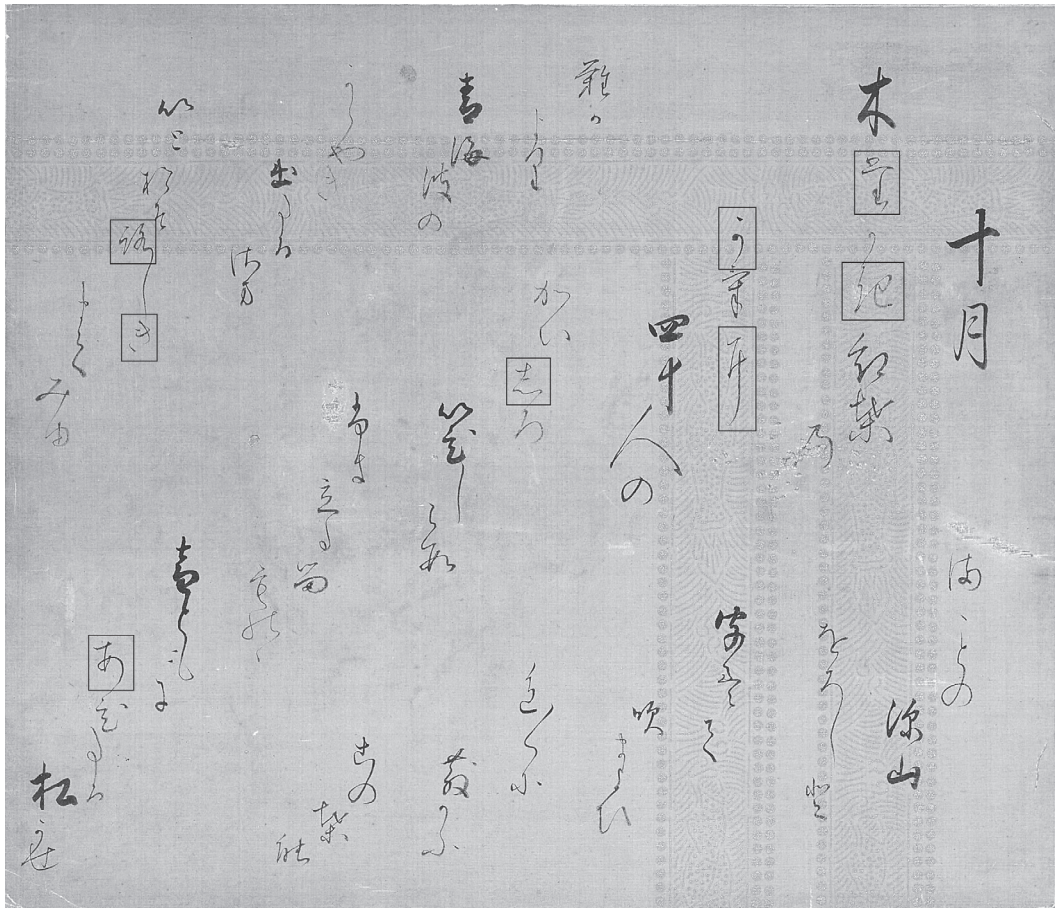
「た」(多)「」・「い」(以)「」・「の」(乃)「」・「こ」(古)「」・「な」(奈)「」・「と」(登)「」・  
「かり」の(可)里能「」・「け」(気)「」・「ゑ」・「ぬ」

これらM I A本の各月(帖)の詞書染筆者は、上掲②アジア美術館本とは、今出川伊季、近衛家熙、九条輔実、裏松意光、堯延法親王が重複し、③柳沢文庫本とは、今出川伊季、九条輔実、武者小路実陰が重複する。今後、M I A本の右隻が見いだされれば、鷹司兼熙(関白)、中院通茂(前内大臣)など、アジア美術館本、柳沢文庫本中のメンバーとのさらなる重複を認めるものと推察する。





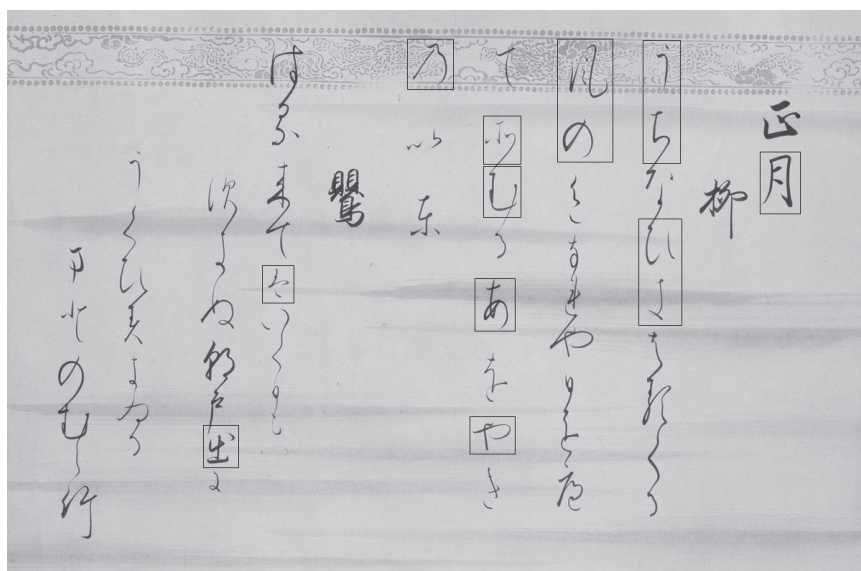
【図18】 MIA本「九月」(賢木) 詞書



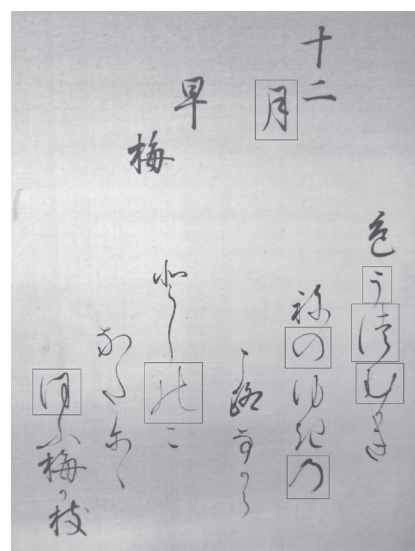
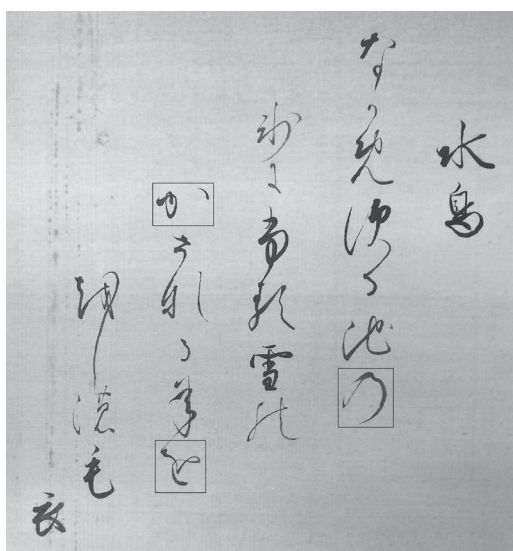
【図19】 MIA本「十月」(紅葉賀) 詞書



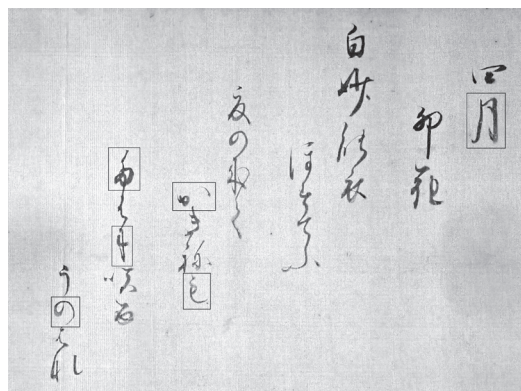
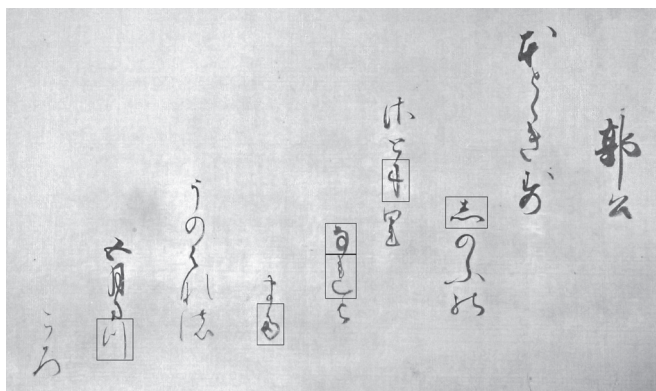
※【図22】～【図27】の文字を囲む□は穂香による加工である。



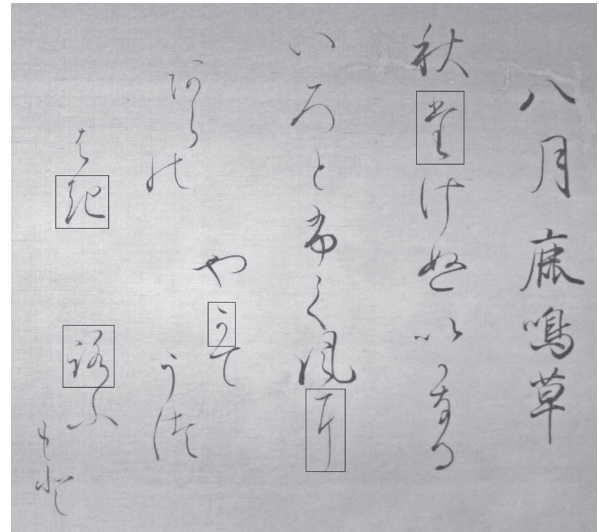
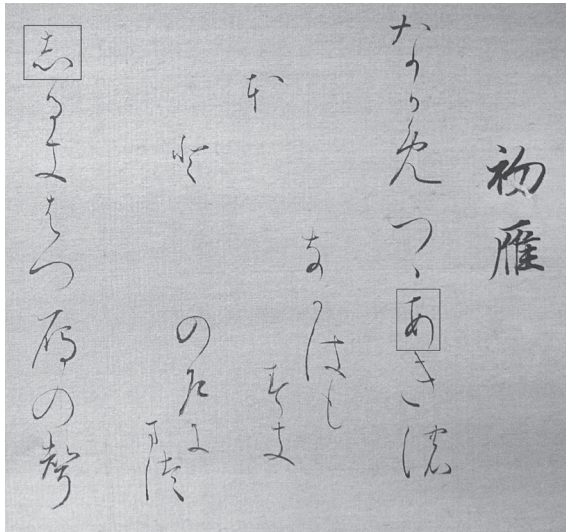
【図22】近衛家熙筆「十二ヶ月花鳥和歌」（皇居三の丸尚蔵館収蔵）のうち、「正月」（部分）



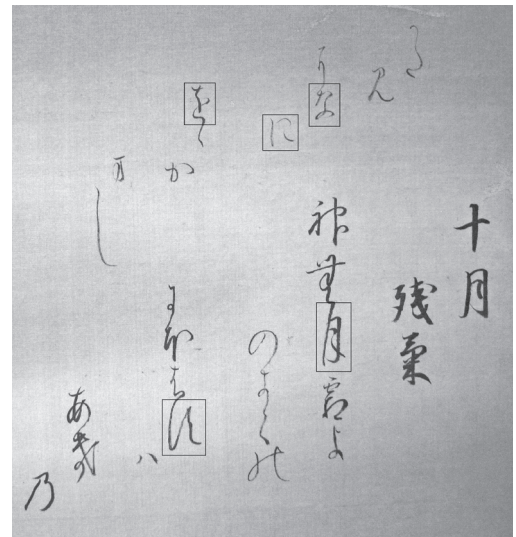
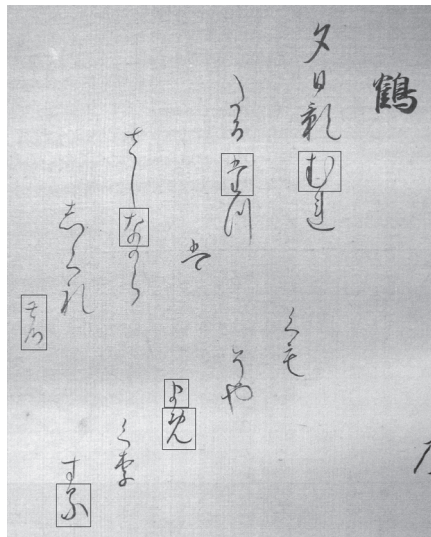
【図23】「十二ヶ月花鳥図屏風」（サンフランシスコ・アジア美術館蔵）・左隻のうち、堯延法親王筆「十二月」（部分）



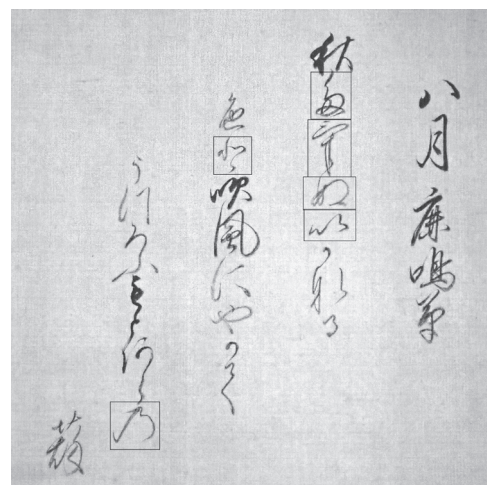
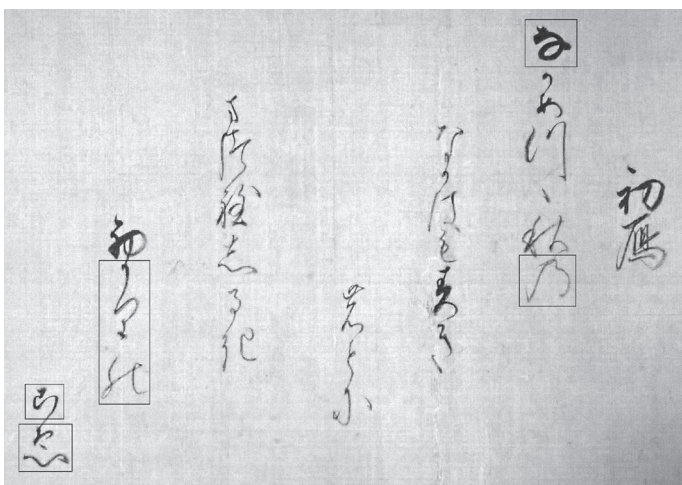
【図24】「六義園十二ヶ月花鳥和歌」（公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会蔵）のうち、今出川伊季筆「四月」（部分）



【図25】「十二ヶ月花鳥図屏風」(サンフランシスコ・アジア美術館蔵)・左隻のうち、九条輔実筆「八月」(部分)



【図26】「十二ヶ月花鳥図屏風」(サンフランシスコ・アジア美術館蔵)・左隻のうち、裏松意光筆「十月」(部分)



【図27】「六義園十二ヶ月花鳥和歌」(公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会蔵)のうち、武者小路実陰筆「八月」(部分)



【図28】 山本素軒筆「十二ヶ月花鳥図屏風」(サンフランシスコ・アジア美術館蔵)

【図23】・【図25】・【図26】・【図28】

Flowers and Birds of the Twelve Months, pair of six-panel folding screens, 1703, by Yamamoto Soken (Japanese, 1683-1706).  
Ink and colors on silk.

Asian Art Museum of San Francisco, The Avery Brundage Collection, B60D82+1-2. Photograph © Asian Art Museum of San Francisco

## まとめ

以上、本稿では、これまで研究者にもあまり知られていなかった土佐光成筆「十二ヶ月源氏物語図屏風」(ミネアポリス美術館蔵)の詳しい紹介を行うとともに、近世土佐派による源氏物語図としての位置づけを考察した。

まず国文学領域からの先行研究をもとに、本作が『源氏十二月詞書』と称される特別な詞書き(場面化)によって、月次に配列構成される極めて珍しい源氏物語図(の左隻)であることを明らかにした。しかもこれは、霊元院が徳川綱吉の右大臣転任を祝して宝永二年(一七〇五)三月に下賜した、『徳川実紀』記載の「十二月畫讚屏風」に該当するものと認められる。近世やまと絵史におけるメモリアルな作品として、また土佐派伝統の小画面源氏絵からの新たな展開を模索した成果として、光成の代表作のひとつに位置づけるべき作品といえる。筆跡検証によって比定を試みた六人の詞書染筆者は、当期の一流の公卿、および法親王らによって占められ、本作の制作事情に十分見合う格を有する顔ぶれを確かめることができた。

光成以後、土佐派では「十二ヶ月源氏物語図屏風」を粉本として蓄積、継承したとみられ、一双を保持する「源氏物語貼込屏風」(土佐光孚筆、徳川美術館蔵)が類品として唯一現存する。これにより、類例が知られない場面選択による二月(花宴)、四月(葵)をはじめ、『徳川実紀』記載の「十二月畫讚屏風」にみられたであろう十二ヵ月十二帖分の図様がおよそ判明した。なお、山本守礼という円山派絵師と『源氏十二月詞書』との接点は大変興味深い問題だが、本稿では先行研究の指摘を確認するにとどめた。識者のご教示をお願いするものである。MIA本の位置づけをより多角的に探るためには、やまと絵系の住吉派、漢画系の狩野派をはじめとする、十七世紀後半か

ら十八世紀初めにかけての源氏物語図制作の動向、相互的な影響のさらなる検討が欠かせない。東山天皇、霊元院、あるいは近衛家周辺での土佐派の消息把握とともに、今後大方の課題としたい。

註

(1) 六曲一隻、絹本着色。(画面本紙)各六九・〇×三四・七センチ。(詞書色紙)各二九・二×三四・〇センチ。本作品は、二〇〇二〜〇三年にかけ、サントリー美術館ほかを巡回した「アメリカから来た日本ークラーク財団日本美術コレクション」展で知られる「クラーク・コレクション」中の一点(右記展覧会出品なし)。「クラーク・コレクション」が二〇一三年にミネアポリス美術館に移譲された経緯については以下を参照。Willard G. Clark and Matthew Welch, "How and Why the Clark Collection moved to Minneapolis", *Impressions* 35 (2014).

(2) 新暦の「十月」と物語中の陰暦「神無月」の理解に混乱がある解説となっているほか、材質は絹本であるべきところ、紙本と表記されている。

(3) 齋麻子「霊元院御撰『源氏十二月詞書』考」、田中隆昭編『日本古代文学と東アジア』(勉誠出版、二〇〇四年)所収。

(4) 和歌料紙裝飾にしばしばみる龍文であるが、烏丸光廣筆「聚楽行幸和歌卷(東京国立博物館蔵)に類似の文様が摺り出されている。M I A本では頭部の図様が不明確になってきている。

(5) 有栖川宮A本の書誌は以下のとおり。一帖、『源氏物語十二月詞書』、宮内庁書陵部蔵、有栖川宮(高松宮旧蔵)本、寛延二年(一七四九)・中務卿職仁親王書写。M I A本との間には字母、漢字・仮名表記の異なるほか、以下の本文対立がみられる。

八月 ・ 有栖川宮A本「こまに」—M I A本「こまよ」  
有栖川宮A本「雲井に」—M I A本「雲井を」  
九月 ・ 有栖川宮A本「心うく」—M I A本「心うくと」

十一月・有栖川宮A本「きため」—M I A本「きためさせ」

有栖川宮A本「わつらひ」—M I A本「わらひ」

十二月・有栖川宮A本「近衛の」—M I A本「そゑの」

「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」の、(マ高一四三)「百人一首色紙形写/詠歌大概御抄/源氏物語十二月詞書/古今類礎/伊勢物語聞書/入木道伝授之留/入木聞書」というマイクロフィルムの一四三〜一五二コマに画像が検索できる。備考には「書名等は『高松宮御所蔵』旧有栖川宮御本マイクロフィルム目録」(昭和四十四年)による」とされる。

(6) 物語の展開(筋)にとらわれず、四季の順に場面を配列する「源氏物語図屏風」も複数ある。『絵画でつづる源氏物語—描き継がれた源氏絵の系譜』(徳川美術館、二〇〇五年) No. 51・52。

(7) 福井松平本の書誌は以下のとおり。一冊、福井県文書館(松平文庫)蔵、『源氏月次絵詞』、『集書』所収。『徳川実紀』は以下による。『新訂増補国史大系第四十三巻 徳川実紀 第六編』、吉川弘文館、昭和五十一年。

(8) 國學院大學久我家文書編纂委員会編『久我家文書 第四巻』(続群書類従完成会、一九八七年)所収、「一七四三 東山天皇・霊元上皇御下賜品記」。

(9) 福田智子「物語の再構成—同志社大学文化情報学部蔵『源氏十二月』の紹介を兼ねて—」、『社会科学』五四巻三号、二〇二四年。季節毎の情緒とともに王朝時代の風雅を享受する調度という意味では、十六世紀前半制作の広島・浄土寺所蔵「源氏物語図扇面貼交屏風」もまた『源氏物語』の筋の展開に関係なく、植物や気象の描写から四季の順に絵を配列(屏風への改装時期は不明)する源氏絵であり、『源氏十二月』と同根の発想に立つといえる。あるいは『源氏物語』ではないが、建長六年(一二五四)成立の『古今著聞集』にみえる「後堀河院の御時繪づくの貝おほひの事」(巻十一・四〇三)には、「さまざまの物語ませて四季に書て、一月を一卷に、十二巻にせられたりけり。料紙、こと葉、源氏の繪のごとし」といった絵画制作の趣向も知られ、四季、月次というフィルターと物語絵享受の濃い結びつきの伝統が知られる。

(10) 岩坪健「伝賀茂真淵撰『源氏物語十二月絵料』」、『研究叢書四三二 源氏物語の享受 注釈・梗概・絵画・華道』(和泉書院、二〇一三年)所収。「十二月言葉手鑑」については、『第三十九回特別展(令和三年度)源氏物語と大友吉統』(大分市歴史資料館、二〇二二年) No.10 参照。

(11) 一幅、絹本着色、『根津美術館蔵品選 書画編』(根津美術館、二〇〇一年) No.142。

(12) 三幅、絹本着色、『石山寺の美 観音・紫式部・源氏物語』(明石市立文化博物館、二〇〇八年) No.64

(13) 松島仁『徳川将軍権力と狩野派絵画―徳川王権の樹立と王朝絵画の創生』(ブリュッケ、二〇一一年)、とくに第三部参照。

(14) 一幅、絹本着色、伝鷹司兼熙賛。『館蔵逸品図録』(敦賀市立博物館、一九九五年) No.14。

(15) 一幅、絹本着色、元禄十二年(一六九九)・整峯元允賛、『高槻城主列伝』(高槻市・高槻市立しろあと歴史館、二〇一三年) No.65。

(16) 六曲一双、紙本着色。各図一〇八・五×四二・〇センチ。各扇に「畫所預從四位下土佐守藤原光孚」款記、「光孚之印」白文方印。葵紋の縁金具が付くが伝来は不詳で、二〇一一年に美術商からの購入により徳川美術館に収蔵された作品である(徳川美術館・吉川美穂氏の「」教示による)。

(17) 徳川本の本紙縦は、M I A本の本紙縦(六九・〇センチ)に詞書色紙の縦(二九・二センチ)を加えた寸法よりもさらに十センチ以上長い。

(18) 前掲註3齋氏『同論文』の翻刻による。

(19) 伊井春樹編『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版、二〇〇一年) 参照。

(20) 『基熙公記』元禄十五年正月二十六日条

(前略) 于中可撰進源氏物語詞十二枚旨有仰者猶考試追而可令左

右旨言上了、此詞被合繪故也(後略)

『同前』同年同月二十七日条

(前略) 終日擇源氏詞、大概可新撰之旨仰之間迷惑不少

『同前』同年同月二十八日条

(前略) 終日擇源氏詞了(中略) 及晚清書了

『同前』同年同月三十日条

(前略) 午刻参内、持参源氏詞書、即被召御前詞書宜思召猶追而可被仰下旨也(後略)

引用は、藤井讓治・吉岡眞之監修『東山天皇実録』(ゆまに書房、二〇〇六年)。(21) 六曲一双、絵・詞各五十四枚。款記「土佐光成筆」、「土佐」朱文重郭方印。M I A本とともに「Love Affairs」展に出品された。屏風全図と「野分」の絵・詞落款・印章は以下を参照。

Miyeko Murase et al, *Art through a Lifetime / The Mary Griggs Burke Collection / (University of Washington Press, 2013)*, Vol1 Japanese Paintings, Printed Works, Calligraphy, Fig.73.Fifty-four scenes from *Genjimonogatari* (源氏物語)。

(22) 以下の展覧会図録参照。『土佐光起生誕四〇〇年 近世やまと絵の開花―和のエレガンス―』(大阪市立美術館、二〇一七年) No.46。『土佐派と住吉派 ―やまと絵の莊重と輕妙―』(和泉市久保惣記念美術館、二〇一八年) No.26。『土佐派と住吉派 其の二―やまと絵の展開と流派の個性―』(和泉市久保惣記念美術館、二〇二一年) No.2。

(23) 一冊、紙本墨画淡彩。伊井春樹『源氏物語古注集成第十卷 源氏綱目 付源氏絵詞』(桜楓社、一九八四年) 参照。また国文学研究資料館の「国書データベース」から画像検索が可能。『平安文学、いとをかし―国宝「源氏物語関屋濤標図屏風」と王朝のあゆみ』(静嘉堂文庫美術館、二〇二四年) No.27。

(24) 二〇一六年まで大阪個人の所蔵。稿者らの調査後市場に出て所在不明。各帖図版(絵のみ)は、秋山虔、田口榮一監修『豪華「源氏絵」の世界 源氏物語』(一九八八年、学習研究社) 所収の「個人蔵 土佐光起筆 源氏物語画帖」参照。

(25) 静嘉堂「源氏絵詞」の詞書は「龍眼木／さか木をいさゝかおりても給へり／けるをさしいれて(中略) いかにかかへておれる櫛そ」を抄出するもので、絵とは

場面的に大きな隔たりがある。

前掲註9福田『同論文』の続稿において、福田智子氏は本文系統研究の観点から当該本文に注目する。『源氏十二月詞書』の諸伝本の九月(賢木)本文が「櫛をいささかおりて」に続く「もたまへりけるをさしいれて」の文節を欠く特徴をとらえて、三条西家証本(Ⅱ享禄本、日本大学図書館蔵)との総体的な近似を指摘する。また、円山派の山本守礼と『源氏十二月詞書』との接触をうかがわせる史料(源氏十二月画粉本)(京都大学文学研究科図書館蔵)にも注目し、各帖の絵が、「物語展開上の重要なエピソードというよりはむしろ、宮廷行事の紹介といった趣である」、また「人物主体というよりはむしろ、行事や情景を主体とする構図を採用している」と分析しつつ、留守模様を用いた九月(賢木)図様の享受による、当該文節を欠く本文定着への影響を予想する。『源氏十二月』九月(賢木)本文と絵画化―SpinesTreeを援用しつつ―、『社会科学』五五巻一号、二〇二五年。稿者は京大本を実現した。類似の諸図を収める『源氏十二月絵巻』(東海大学附属図書館蔵)は国文学研究資料館の国書データベースで画像検索できる。

なお「賢木」の当該本文については、かつて野口剛氏も土佐光吉筆「源氏物語手鑑」(和泉市久保惣記念美術館蔵)など四点の画帖作品について、問題の「もたまへりけるをさしいれて」の文節を欠くことに着目し、三条西家証本(日本大学蔵)本文との一致は、「室町末期から江戸初期において三条西家証本が尊重されたことを反映しているのだろう」と言及している。野口剛「源氏物語画帖の詞書をめぐる考察」(『京都文化博物館研究紀要 朱雀』二十一集、二〇〇九年)の註5。

(26) 田中喜作「住吉家鑑定控 一」、『美術研究』第三十八号、一九三五年。国文学研究資料館の「国書データベース」で画像検索可能。

(27) 図版とともに「淡彩 五十四幀 於廣島大本宮賜天覽 竪五寸五分/巾五寸」の情報がある。なお、東京文化財研究所のデータベース「売目録作品情報」では、光成の源氏絵として本作例を含め計五点が検索できる。

(28) MIA本と、前章で検討したMIA「光成貼交」の縁金具(ともに丸紙)が家

紋ではなく、草の葉先を抱き寄せるような意匠でよく似ている(挿図上・MIA本、同下・MIA「光成貼交」)。MIAへ受入れ(それぞれ二〇一三年、二〇一五年)の後にアメリカで修理・改装されたのかもしれない。



(29) ①一巻、『近衛家熙―風雅の探求―』(宮内庁三の丸尚蔵館Ⅱ刊行時、二〇〇一年) No.5。②六曲一双、遠藤楽子「山本素軒筆十二月花鳥図屏風の制作事情―サンフランシスコ・アジア美術館本における近衛家熙の役割―」、『MUSEUM』五九七号、二〇〇五年。③一巻、宮川葉子「柳沢文庫蔵 霊元院下賜『十二月和歌』『国際経営・文化研究』十一巻一号、二〇〇六年。

本稿は、前所属(地方独立行政法人大阪市博物館機構 大阪市立美術館)において研究分担者であった、JSPS科研費 JP18K00197(「江戸時代の土佐派の基礎的研究―作画領域の確立と画風の継承から見た土佐派の活動―」、二〇一八〜二〇二二)による研究成果である。

謝辞

本稿をなすにあたり、ご所蔵作品、ご寺宝の調査、ならびにその画像掲載についてご高配を頂戴しました、ミネアポリス美術館、サンフランシスコ・アジア美術館、石山寺、公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会、皇居三の丸尚蔵館、静嘉堂文库美術館、泉涌寺心照殿、東京文化財研究所、徳川美術館、悲田院の各位、各ご担当者の皆様に対しまして、末筆ながら深謝申し上げます。また、作品調査、画像調達に格別の便宜をお図り下さった、ミネアポリス美術館のラルストン有政裕子氏(Curatorial Department Assistant for Japanese and Korean Art)、サンフランシスコ・アジア美術館の森嶋由紀氏(Associate Curator of Japanese Art)に対しまして、重ねて厚く御礼申し上げます。